



福島産Tシャツ発売へ

雇用創出 綿花自給率アップを

東日本大震災で被災した福島県いわき市などで、耕作放棄地などを利用して無農薬で綿を栽培する「フクシマ・オーガニックコットンプロジェクト」が展開中だ。収穫したオーガニックコットンでTシャツなどの衣類を製造し、新たな仕事につなげようという試み。週末には、首都圏からボランティアらが訪れて農作業に加わるなど、応援の輪が広がっている。

【明珍美紀】

耕作放棄地利用「オーガニックコットンプロジェクト」

福島生まれのオーガニックコットンを素材に取り入れた初のTシャツが6月から発売される。いわき市や近郊の農地で昨秋、収穫された綿と、米国産などの有機綿をミックスしたもので、縫製は福島県の工場に委託。無地やイラスト入りがあり、今年は約9500枚を製造する計画だ。

プロジェクトは、いわき市のNPO法人「ザ・ビーブル」(0246・52・2511)が主催し、オーガニックコットン商品の製造、販売を手がける「アバンティ」(東京都新宿区)などが協力している。

東日本大震災による津波や東京電力福島第一原発事故などで打撃を受けた地で、新たな仕事をつくらうと、昨春から市内15カ所の農地で和綿の有機栽培をスタートした。地元の農家をはじめ、いわき市に避難してきた原発事故の被災者らが農業に関わり、週末には東京など首都圏から援農ボランティアらが通っている。

清掃や植林などの環境アクションを推進する「ふくしまと清掃運動会」実行委員会が昨年9月に実施した日帰りのバスツアーには10代から80代までの約80人が参加し、草引きなどに汗を流した。

「福島の未来を自分たちの手でつくりたい。まずは市内の耕作放棄地を借り、無農薬の循環型農業で、地域再生を図ろう」と思った「ザ・ビーブル」理事長、吉田恵美子さん(56)は説明する。「希望の種を日本中の人にまいてもらいたい」とTシャツに先駆けて、復興支援グッズ「オーガニックコットンベイク」を商品化した。種の入った綿を用いたマスコット人形で、仮設住宅に住む女性や福祉施設のメンバーらが仕上げた。価格は1個840円で、そのうち80円がつくり手の収入になる。

今年は5月から種まきが始まり、同市に隣接する広野町などの畑でも栽培が始まる。

「日本に流通する綿製品のほとんどは外国からの輸入綿。被災地での雇用創出を含め、綿花の自給率を上げるにしたい」とアバンティ社長の渡辺智恵子さん(61)は強調する。「福島産の綿製品をみなさんに使ってもらうことによって、このプロジェクトが継続できる」

「ふくしまと清掃運動会」実行委員会が昨年9月に実施した日帰りのバスツアーには10代から80代までの約80人が参加し、草引きなどに汗を流した。

「福島の未来を自分たちの手でつくりたい。まずは市内の耕作放棄地を借り、無農薬の循環型農業で、地域再生を図ろう」と思った「ザ・ビーブル」理事長、吉田恵美子さん(56)は説明する。「希望の種を日本中の人にまいてもらいたい」とTシャツに先駆けて、復興支援グッズ「オーガニックコットンベイク」を商品化した。種の入った綿を用いたマスコット人形で、仮設住宅に住む女性や福祉施設のメンバーらが仕上げた。価格は1個840円で、そのうち80円がつくり手の収入になる。

今年は5月から種まきが始まり、同市に隣接する広野町などの畑でも栽培が始まる。

「日本に流通する綿製品のほとんどは外国からの輸入綿。被災地での雇用創出を含め、綿花の自給率を上げるにしたい」とアバンティ社長の渡辺智恵子さん(61)は強調する。「福島産の綿製品をみなさんに使ってもらうことによって、このプロジェクトが継続できる」



ニュルンベルクで開かれた「Bioファ」に参加したザ・ビーブルの吉田さん(前列左)ら。ブースではサンプルのTシャツを展示一大和田順子さん提供

復興の取り組み紹介 被災地NPO 独の見本市出展

ドイツのニュルンベルクで2月に開かれたオーガニック製品の世界最大の見本市「Bioファ2013」に、日本貿易振興機構(ジェトロ)主催のジャパンパビリオンが初めて開設され、原発事故の被災地である福島からNPO法人「ザ・ビーブル」が出展した。

ブースでは「フクシマ・オーガニックコットン」のTシャツのサンプル品を展示。理事長の吉田恵美子さんが海外の来場者にオーガニックコットンを通じた復興の取り組みなどを説明した。

同行した一般社団法人・ロハス・ビジネス・アライアンス共同代表の大和田順子さん(53)は「これは日本の新しい未来をつくる試みでもある。それを環境先進国ドイツで紹介した意味は大きい」と話した。